俳優のむすめ

『ぢゃあ如何しても退學なけりゃならないの？』

『え、中途で退校すのは眞實に殘念ですけど……仕方が無いわ……』と投げやる様に言って凝乎と行手に架かってる石橋の上を低う飛んでゆく燕の行方を見戍りながら、悖と幽かな溜息。

年は十八の色白く髪黒く、級中切ての美人の君子。何の俳優の娘がと岡燒連の陰口時に寄っては面と向っての嘲笑に、いつも其活々とした眼に涙を含べるのが常であったが、其眼の今日はいつになく打沈むでは居ながらも、何事か決心の影が現はれて居る。

『自分ぢゃこんなことに成ろうとは夢にも思ってやしなかったのですが、父が思ひ掛なく彼麼ことになってしまって……え、腦充血でしたの、私眞實に如何しようと思ひましたわ、倒れて室へかつぎ入れられた時、私を枕許に呼んでね父が後を繼いで呉れ、然し品性を高潔になと一言讀みかけた脚本を持った儘、その儘なんですの……私泣きましたわ、だって口惜しくって切なくって……どうしても自分は俳優にならなけりゃならないのかと思ふとつひ情無くなって……』

『だけど……』と文子は何か言はんとしたがさて適當の言葉が無いらしく其儘黙ってしまって、海老茶の袴を蹴って出る君子の靴と自分の赤い鼻緒のつま先とが言ひ合さずに揃ってゆくのを見つめて居る。

右手の小高き岡なる瓦焼きの煙りが一際むらがり出て向ふの杉から放れた烏三羽、薄煙の中を飛んでゆく。

『だけどねぇ文子さん！　私決心しましたの、何の俳優だとて恥づることがありませう、多少世に知られた父の後を繼いで立派に舞臺の上で働いて見せますわ、私、お友達に嘲笑されて蔑視れて、悲しかったのは未だ藝術の美を認めなかったんですわね、品性さへ高潔なら、操行さへ確かなら、何の恥づる事がありませう……もとより俳優の娘が……』我と我を勵ますやうに言って、お召しの矢羽根の胸を張らして、青葉の下道を翳さずにきたオリーブ色の洋傘をつと廣げて文子へとさし掛けた。

『それでね一昨日で父の百ケ日も終へましたし、學校の方も決定がつきましたしするからいよいよ劇界に身を投じる積りですの、まあ暫くは東京に居りません、もと父の門弟でした杉山の一行が明後日、東北地方に参りますのでそれに加はってね……暫く遭はれないわ』

『えっ、じゃあ明後日……？』

『は、それで今日はお暇乞ひかたがた参りました譯ですの、文子さん！　長々貴女にお世話様になってねぇ、俳優の娘として何誰も合手にして呉れない私を貴女一人は……よく今まで交って下すってね、私感謝しますわ、文子さん！　此後もともね……』

洋傘の柄の房を結んでは解き結んでは解きして居る文子の手を取って強う握りめた。

『え、お互に……でも明後日なんてまあ』

『二年ばかりはお目にかゝらない積り、文子さんもお健かにね、他日貴女にお目にかゝるのは、それは舞臺の上でゞすわ、私の初舞臺には是非……は東京でゞす。』

『その頃は私も學校が卒業ますから必と故郷に居るやうになるでせうよ』

道の両側の麥畑に仕事して居る人達に見送られて二人は松並木に出た。その並木のはづれの葺屋根造りの家の前には人力車が一輛休んで居る。

『文子さん、もう此所までゞよくってよ、後は車でまゐりますから……如何も有難う、お父様やお母様に宜しくね』

『じゃあ　君子さん　あなたの成功するのを私、待ってゝよ、お父様のお遺言を忘れない様に……』

『有難う……さよなら　御機嫌よう』

『さよなら！』

車夫は梶棒をとの上げた。

『あ、あのお兄様に……』

此時もう車夫は馳せ出したので、君子は口を噤んで凝乎と意味あり氣に文子を見た、文子もまた何か言はふと口を動かしたが、たゞやはり君子の顔を瞶めて居る。

君子は目禮した。

車はいよいよ遠く遠く。

底本：「水野仙子全集」第一巻
初出：「女子文壇」明治三十九年八月
テキスト入力：小林　徹
公開：平成二十九年八月十五日
修正：令和五(2023)年六月二十六日
リンク：水野仙子ホームページ